

目からなみだがながれていた
中野くんが

「人間とねずみはおなじやなあ」
っていった

ここで二人の子が体験したのは、人間とかねずみと言った区別を越えて、「生命」そのものに直接触れた感動である。この原体験は、やがて「人間愛」とか「平和」の核になるべきものであろう。「人間とねずみはおなじやなあ」と言う一行は、そんな重みを持って響いてくるのである。

弟

小学五年 女児

テレビドラマ

走れノレックスを見た

男の子が大切にしていた

競馬の馬が足の骨を折った

最後に馬が手術を受けて

数日後に、死んで行った

弟の方を見ると

目を真っ赤にして

声を出さないうで

静かに泣いている

私にじめられて

泣いている顔とは

ぜんぜんちがう！

まるで別人みたいだ！

この詩で判ることは、「他者への静かな涙」を体験した弟と、その弟のより深く形成された人格を見て取った姉の感動である。そして、この両者とも人生にとって大切な意味を持つのだ。子ども達は「自然」や「生命」の神秘に触れ、あるいは「無限」を直感し言い知れぬ感動を持って体験を積み重ねていくのだが、そのような場合我々大人は、その体験が、その子の心により深く記されていることを願ひ、共感を持って向かうべきではなからうか。

提言